2012 年度報告書（研究員）

氏　名	松永　歩
職　位	短時間研究員

研究概要

本研究は、明治期の新教育を受けた沖縄の新エリートの帰属意識の揺らぎに関する研究である。それは、19 世紀末以降に登場する沖縄の「自立」の思想と行動に迫る研究である。沖縄新エリートが、沖縄の中で財界、政界へと進出する中に、沖縄の自立構想があったことを明らかにした。それはまた、半植民地化していた沖縄のポジションを立て直す一つの手段としての「自治」構想であった。この研究は、エリート間の人的コネクションに視点を定めた政策過程の史的分析という意義を有する。

さらに、明治後期の新世代エリートの地理的想像力の醸成を沖縄師範学校の修学旅行との関連で跡づける作業を行った。同時期の他府県の師範学校の修学旅行は軍事的要素を有していたのに対し、沖縄師範学校の修学旅行は視察活動中心であったことを確認した。感動や驚きという本土体験が、次第に沖縄と本土の比較に転じられ、そこに「遅れている」沖縄像を沖縄の新エリートが発見する過程を候補者は明らかにした。沖縄の新エリートは、沖縄が日本の有機的部分として位置づけられることを、その後の未来像として選択するのである（この論文は、『政策科学』19 巻 4 号に掲載）。

これまでの研究の成果を積み上げ、「近代沖縄における新世代エリートの形成」と題し博士論文を 2012 年 3 月に提出した。本研究は、（１）沖縄内部の中心―周縁関係、（２）新旧沖縄エリート間の亀裂を基本に据えながら、（３）沖縄―本土関係、（４）植民地台湾の台頭によるインパクトを背景とした「沖縄の帰属意識」の形成や変遷を捉えた。博士論文は、こうした「沖縄の帰属意識」にみられる複雑な変遷過程を、植民地台湾の台頭までの時期を中心に、政治的統合装置としての学校教育制度という視角から明らかにした。本土日本と沖縄、そして植民地台湾の間の国際地域関係史として、沖縄の近代を捉え返そうとする試みである。

業績リスト（著書、論文、報告、その他に分けて主要なものを記入する）

【論文】

1.松永歩　単著　「近未来予想図としての『沖縄対話』―沖縄の近代化に関する一考察―」、『立命館国際地域研究』、立命館大学国際地域研究所、27 号、pp.91 - 109、2008 年。

2.松永歩　単著　「沖縄公同会運動と早熟な「自立」構想―「特別制度」の「自治」をてがかりに―」、『政策科学』、立命館大学政策科学会、16 巻 2 号、pp. 113 - 126、2009 年。

3.松永歩　単著　「地理的想像力の醸成と沖縄師範学校の修学旅行―日琉同祖論の一前提―」、『政策科学』、立命館大学政策科学会、18 巻 4 号、pp. 225 - 240、2012 年 3 月。

【報告】

西出崇・苅谷千尋・宇ノ木建太・松永歩・矢島　信・寺田卓矢　共著　「市民社会における公共施設の役割――京都会館・岡崎地域を事例として」、大学コンソーシアム京都「都市

政策研究会」、於大学コンソーシアム京都、2010 年 1 月。
松永歩　単著「明治期沖縄における新世代エリートの形成―帰属意識に関する一考察」、政治思想読書会（第 233 回）、於同志社大学、2012 年 12 月 8 日。